

背表紙

表紙

書名：
富士見のあゆみ

出版年月： 1982(昭和57).3

著者： 富士見市

本サイズ：

A5サイズ(148×210mm)

厚さ27mm

ページ数： 519P

なか見！検索 コンテンツ：

- ・目次
- ・口絵
- ・唄（作業歌と童歌）
- ・昔の話（伝説）

「富士見のあゆみ」は、市史編纂事業が昭和53年（1978）から開始され、市制十周年記念誌として昭和57年3月に発行。その後、富士見市史 通史編 上巻（平成6.1）、下巻（平成7.10）として刊行されている。

※カバー紙は「鶴馬村絵図」（横田正志家蔵）



富士見のあゆみ 目次

口絵

序

市民憲章

自 然	一 富士見市の自然とその背景	1 自然地形 2 地質 3 富士見市の自然のおいたち 4 気象と微気候
	二 古自然の成り立ちと植物	1 富士見市の植物の種類 2 台地に残る古自然の植物 3 台地林と屋敷林 4 沖積低地の植物 5 古気候・古地形を語る植物 6 主要植物相の移り変わり 7 台地林と屋敷林
	三 富士見市の動物	1 昆虫類 2 両生・は虫類 3 鳥類 4 哺乳類 5 鳥類および哺乳類の外部寄生虫
	四 自然と公害	1 新河岸川水域と水質汚濁 2 大気汚染と公害スモッグ 3 地盤沈下 4 失われつつある緑
原始・古代	一 旧石器時代の狩人	1 旧石器時代の自然環境と文化 2 富士見の旧石器時代 3 旧石器時代の人びとの生活
	二 最古の縄文土器	1 富士見の縄文時代 2 土器の出現 3 尖底土器の文化 4 貝殻条痕文土器の文化
	三 貝塚の文化	1 縄文海進と古入間湾の貝塚 2 打越遺跡の貝塚 3 水子貝塚
	四 狩猟と植物採集の暮らし	1 環状集落 2 中期の生活
	五 縄文文化の衰えと祭り	1 少なくなる集落と環境悪化 2 祭りと呪術 3 縄文社会のゆきづまり
	六 弥生時代の暮らし	1 弥生時代と農耕文化

富士見のあゆみ 目次

		2 石器を使う弥生人 3 集落と周溝墓
	七 古墳と武蔵の豪族	1 古墳の発生と古墳時代 2 武蔵の古墳と豪族 3 富士見の古墳
	八 古墳時代の人びとの暮らし	1 富士見の古墳時代の集落 2 農耕生活の向上
	九 古代の人びとの暮らし	1 古代の武蔵と入間郡 2 富士見の古代集落 3 生産の向上 4 平将門の乱と古代社会の変質
中 世	一 武士のおこり	1 入間川水系と村山党 2 村山党金子一族 3 難波田氏の成立 4 入間川水系の大洪水と樽沼堤の改修
	二 難波田氏の盛衰と鎌倉道	1 武蔵野合戦と難波田氏 2 難波田氏所領の鶴岡社寄進 3 鎌倉道
	三 中世人の信仰と生活	1 板碑に見る信仰 2 下南畑八幡神社の鰐口 3 熊野参詣と十玉院 4 発掘された中世の館と墓
	四 富士見市域の戦国時代	1 河越合戦と難波田氏の滅亡 2 所領役帳と上田氏の支配 3 難波田城跡
近 世	一 家康入国のころ	1 関東の知行割 2 村と領主
	二 村のなりたち	1 慶安の検地 2 新田開発
	三 村のしくみ	1 村役人の変遷 2 名主の選出
	四 農民の負担	1 年貢と諸役 2 助郷
	五 領主の移り変わり	1 元禄期の検地と柳沢吉保 2 鷹場の支配
	六 村人の不安	1 天明の飢饉

富士見のあゆみ 目次

		2 水害と佃堤
	七 産業の発達	1 水車の利用 2 紅花
	八 江戸との交通	1 新河岸川の舟運 2 川越街道
	九 近世の教育	1 寺小屋 2 算額
	十 幕末の社会動乱	1 ぼっこし（武州一揆） 2 川越藩の農兵取り立て
近代	一 明治維新と村	1 押し寄せる「ご一新」 2 村の「開化」－小学校の設立 3 地租改正と村の暮らし
	二 「自由民権」の時代と三村の誕生	1 「自由民権」の波 2 つくられた三つの村 3 三村の諸相
	三 日清・日露戦争と三村	1 戦争と村 2 広がる教育と教化 3 水との闘い－明治四十三年の大洪水
	四 大正期の戦役と大震災	1 第一次大戦とシベリア出兵 2 関東大震災の被害と救援活動
	五 大正デモクラシーと村の変化	1 青年たちの文化活動 2 学校教育の状況 3 村の交通の発達
	六 地主制農業と南畑小作争議	1 地主と小作人 2 南畑小作争議 3 詩集『野良に叫ぶ』と『農民哀史』
	七 昭和初期の農村生活	1 昭和初期の農家の生活 2 二人の農民からの聞き書き 3 産業組合など村内諸団体の活動 4 福岡火工廠反対闘争
	八 戦時下の生活と耕地整理	1 二つの洪水の記録 2 南畑の大水害と耕地整理 3 第二次大戦下の富士見
現代	一 終戦直後の三村	1 終戦と三村の世相 2 「民主化」のうねり 3 青年団と婦人会

富士見のあゆみ 目次

	二 農地改革と農地の集団化	1 進む農地改革 2 農地の交換分合
	三 三村の合併－富士見村の誕生	1 町村合併促進の背景 2 合併運動の始まり 3 難航する合併交渉 4 合併の成立
	四 進む都市化と村の変ぼう	1 住宅公団の進出 2 人口増に追いつかない学校建築 3 農村の変ぼう 4 すすむ社会教育
	五 水谷東の水害と境界の変更	1 遊水地帯としての水谷東地区 2 水害の発生 3 町と住民の水害対策 4 境界の変更
	六 市制の施行	1 町制施行後の町の移り変わり 2 市制施行の準備始まる 3 新庁舎建設計画の具体化 4 市制の施行 5 新庁舎の完成
	七 みずほ台駅開設への道のり	1 東上線と水谷村 2 開設運動の進展 3 区画整理事業始まる 4 みずほ台駅ついに開設
	八 富士見市の未来	1 市制施行後のあゆみ 2 これからの富士見市 3 むすび
民 俗	一 村の変遷と組織	1 字名（小名）の変わるとき 2 村の組織と運営
	二 家屋と「家」の生活	1 農村家屋の配置と間取り 2 家を建てるとき 3 家族と本家分家
	三 暮らしのリズム－年中行事	1 村での年中行事 2 米作りと麦作り
	四 人の一生	1 出産と育児 2 祝儀 3 葬送と供養
	五 信仰と祭礼	1 寺社年中行事

富士見のあゆみ 目次

		2 祭りと講
		3 ふるさとの石仏
		4 里神楽
		5 獅子舞
		6 お囃子
		7 万作
		8 唄（作業歌と童歌）
	六 昔の話	1 五輪塚
		2 えぼとり地蔵
		3 姥袋
		4 犬の塚
		5 倶利伽羅不動のドジョウ
		6 弁慶もぐり
		7 いしや坊主
		8 獅子舞
		9 赤飯塚
		10 お舟山

参考文献名

歴代の長

市議会議員一覧

文化財一覧

神社・寺院・教会等一覧

市史編さん関係者一覧

市史編さん事務局

略年表

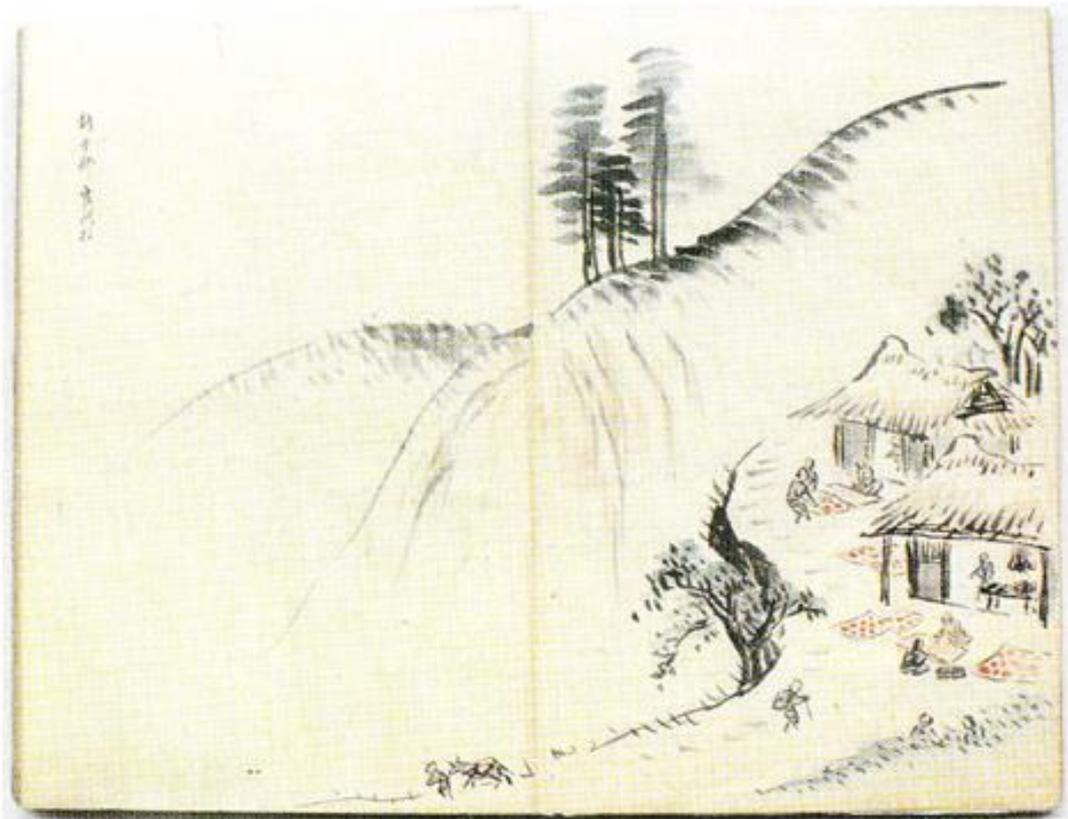
あとがき



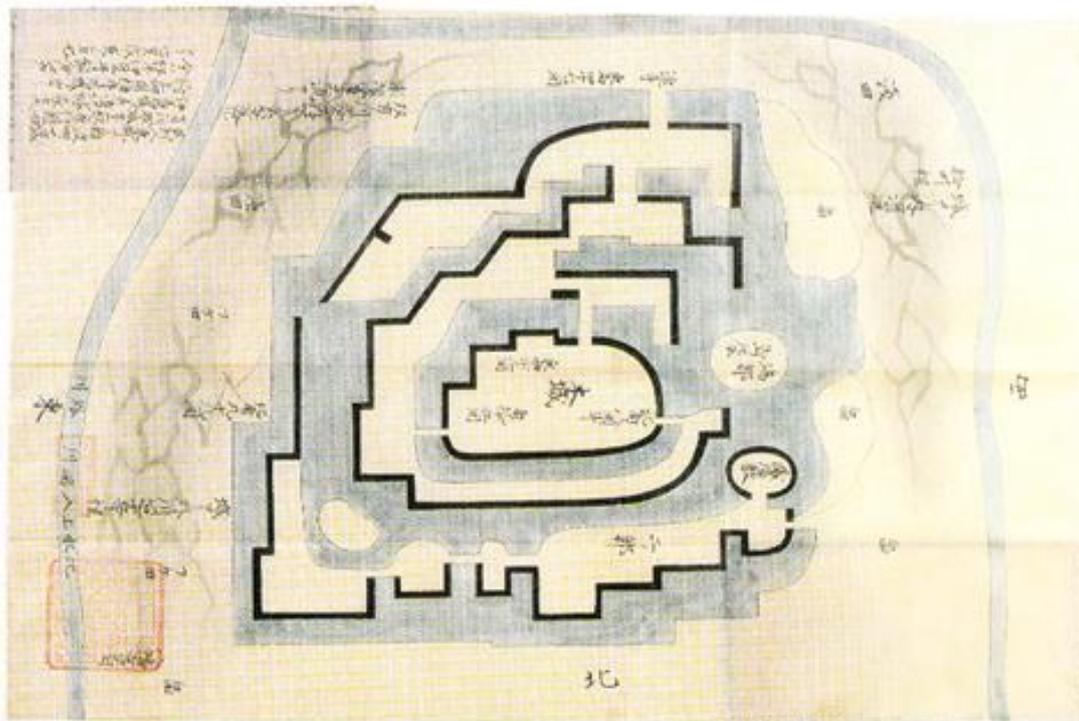
市内に自生するカククリの花



竪穴住居跡と貝塚



江戸時代の紅花栽培風景



武蔵国下灘波田城図 (広島市立中央図書館蔵)



野良に叫ぶ初版本(渋谷定輔蔵)



城の下天王様祭礼の子供神輿(牛頭天王)

六 信仰と祭礼

8 唄 (作業歌と童歌)

日本の唄(民謡)には、広い意味の作業唄が多いことが特色の一つとされているが、これを唄によって作業の能率を早め、あるいは気分転換を図ることとも関係があり、唄と労働が密接に結びついていたことを表している。

概して作業唄は単純なリズムで難しいものは少なく、口から口へと、耳から耳へと伝えられてきたものであり、またリズム、歌詞、ハヤシ言葉が労働に合わせて作られたものであるため、たいへん地域性の豊かなものとなっている。しかし近年の生活変化の著しい中では過去のものとして忘れ去られようとしている。

一方わらべうたは、その内容も多岐にわたり、一貫性に欠ける傾向もあるが、子供の世界や特性が反映されており、遊びのための唄がその中心にあるといえよう。

郷土色豊かな唄は、今も古老の口からかすかに聞かれ、そのいくつかを挙げることにする。

新河岸川舟唄

ハァー主が棹さしゃ私はともで 御飯焚き焚き舵をとる。

ハァー千住出てから牧の野(や)までは 棹も櫓かいも手にのらぬ。

松平伊豆守が正保四年(1647)川越と江戸との船運を開いた後、天保のころから早舟が定期の貨客船となった。午後三時新河岸を出帆して新河岸川を下り、外川(荒川)の戸田付近から棹おしが櫓に変わる。このころに船頭が眠気覚しに歌った唄が新河岸川舟唄(千住節)で、櫓の鉄環のカタンカタンと鳴る拍子に合わせて歌われた情緒的なものであった。

棒打ち唄(麦打ち唄)

大山先から雲が出た あの雲はいかにも雨か嵐か。

岩殿山で鳴く鳥は 声もよし音(ね)もよし岩のひびきで。

六月の下旬から七月にかけて、刈り取った麦を庭一面に広げ「クルリ棒」でたたいて粒を落とす脱穀作業の際に歌われた作業唄である。10人から20人の男女が向い合い交互にクルリ棒の先にて麦を打つため、拍子合わせの役目も兼ね作業促進をうながした。

たこつき唄（土羽打ち唄の内）

青いナァヨーコラ 松原ナァヨー

あれ見やしゃんせ アーイヤサーコラサー。

枯れてナァヨーコラ 落ちてもナァヨー

ありゃ二人連れ アーイヤサーコラサー。

土羽打ち唄

手子、ヨイトヤマータァーコラサーノソーライ

音戸とり、大工さんよりマータ木びきは恐いよソーライ

手子、ヨイトヤマータァーコラサーノソーライ

音戸とり、仲の良い木をマータ切り分けるよソーライ

ならし唄（土羽打ち唄の内）

ならせならせよコラショー 土羽棒でならせよーホイ

ならせ無ければ土羽じゃないよコラショー

この土羽打ち唄は、大正十一年（1922）ごろより新河岸の土手作りのときに多く歌われていた。

川が氾濫し堤防決壊による復旧工事のときや、新河岸川の改修時にも土手作りに働く人びとの中で歌われた唄である。

たこつき唄は、臼のような石の回りに何本もの縄をつけた道具で、周囲からいっせいに縄を引っ張って宙に浮かせ、「ドスンドスン」と落として土を固めるなかで歌われた作業唄である。次は土手の斜面を多くの人が横一列に並んで「どは棒」という握りのところを削った身の丈より少し短い丸太棒で、斜面の上を打ち固める作業にも歌われたもので、このときは唄だけ歌う「音頭とり」と打ち手「手子」とに分かれた。これをどば打ち唄という。

それから後、斜面と上面をならす作業のときに、ならし唄が歌われた。またならし唄はモチつき前の「練り」のときにも同じ節で歌われた。このように多くの作業唄を生んだ堤防工事の一日の賃金は、女七七銭から八八銭、男一円から一円五〇銭で、報われることの少ない労働であった。

このほか、臼ひき唄、機織り唄、お茶もみ唄、産業組合の歌などがあり、作業唄のほかでは、とのさ節、ラッパ節、相撲甚句、むじなの数え歌などもある。

毬つき唄（童歌）

此処を申せばなかむらよ、なかむら名主の中娘、
年は十六名はおさん、おさんの友達幾人よ、
二十四人の友達が、上下揃えて着飾って、
天神下へと出てみたら、ちゃ舟とこ舟と乗りあって、
ちゃ舟へ乗ろうかおさん殿、こ舟に乗ろうかおさん殿、
屋形舟へ乗り込んで、橋の下まで漕いで行く、
漕いで行く、
おさらばいっかんかしました、つきました。

童歌は子供たちの遊ぶ動作に合わせて歌われる、
ほかにも毬つき唄、お手玉唄、なわとび唄、なわはね唄（ごむだん）などが伝えられて
いる。

六 昔の話（伝説）

伝説は話の中に具体的事物、年代、場所などが語られそれに合理性解釈が加味され、人びとに真実性のあるものとして信じられたきた。「むかしむかし」という形式の語り口から始まる昔し話とは異なり語り口に型式がないことも特徴といえる。

また、伝説は自然の由来を説明する自然伝説と、人の行動や人間性を説明する歴史伝説との二つに分けることもできるが、いずれにしても、伝説を理解するためにはそれが語られている地域の歴史と、語り伝えてきた人びとの心持ちとを理解することが必要であるように思われる。

ここでは、地域的に南畑・水子・針ヶ谷・鶴馬・勝瀬と分け、一地域数編ずつ収録するにとどめた。（『ふじみ伝説昔ばなし資料篇』一、二）によると、昭和五十四年度、一一四話。五十五年度、二一三話が収集されている。収集された伝説は、木・岩・石・水・坂・峠・山・祠堂など対象別に分けられが、その紹介は後にゆずる。

1、 五輪塚

難波田氏の墓地と思われる五輪塚があり鎧・兜がいかっている（埋まっている）とか、内堀に金の船がいかっているという。また、この五輪塚を掘ったり、いたずらすると、夜中に白い馬にまたがった鎧武者が来るといわれていた。

（注）徳川幕府編さんの『新編武蔵風土記稿』によると、下南畑村の頃に南畑白跡「又此所より西の方一町許を去て少し高き所に五輪の石碑あり、文字没滅して読べからず、其傍に断碑二基立ち、由来詳しならず是等もし難波田氏の碑なるにや」と記されている。

2、 えぼとり地蔵

ここの地蔵は、一名えぼとり地蔵と呼ばれている。手や足に「エボ・イボ」ができたときは、クロダンゴ（土で作ったダンゴ）を作って供え自分のエボのある所と同じ所（地蔵様）に少し土をつけて治るようお願いした。願いがかなないエボがとれたときは、白い米の粉のダンゴを白い紙に乗せて供え、お地蔵様にお礼をした。なお同種の地蔵は蛇木にも一基みられる。

（注）南畑小学校東久保分校（昭和五十六年廃校）東北の道角に延命型立像の地蔵石仏がそれであり、台石に正徳癸巳歳（正徳三年一七一三）正月二十四日

天下泰平當所繁昌と記文が見られる

3、姥袋（ばぶくろ）

柳瀬川に高橋という名の橋があった。あるときこの橋の上で子守りをしていたところ、子供が川に落ち早い流れにのまれてしまった。それを救おうとして子守りも川に飛び込んだが子供も子守りも二人とも死んでしまった。その流れの下は川がよどんで、流れ淵となり、その後、姥が淵とか、姥袋と言われ伝わってきた。

（注）『武蔵国郡村誌』に、「本村の北の方（水子）にあり、天文のころ大石政吉の居城（志木）より難波田弾正の居城へ通路ありし故、高橋という」と記されており、また尾張藩のお鷹場預りを水子村高橋弥三郎家（または孫三郎）がしており、一名、鳥見橋とも鷹橋とも呼ばれていた。

4、犬の塚

あるとき水子般若院は南畑の十玉院の伴として本山の京都聖護院に登った。そのとき愛犬を連れていった。無事に勤めを果たして帰ってきた。その後、この犬が死ぬと修験の一員として聖護院にまで登った犬として塚を造営し厚く葬ったという。また、尊祐法院自身も死後、その地に葬られたと伝えられるが、いつかこの場所は犬の塚との名がおこり伝えられてきた。

（注）『新編武蔵風土記』によると、「水子村、小名、犬の墓。此の所に九尺四方許の塚あり」と記されている。この水子西小原の犬塚（墓）には一基の墓碑が建立されていて、武州入間郡水子村般若院（現水宮家）が施主となって正保三戌天（一六四六）十月十三日権大僧般若院尊祐法印真と月清真信女位の記文が読み取れる。現在この墓石は水子大応寺境内に移されている。

5、俱利伽羅不動のドジョウ

水子栗谷津の沢奥、木々の根本より泉がわき、流れは小川となり飲み水や田の用水となっている。あるとき、一人の者がこの小川からドジョウをたくさん捕え家でナベに入れ、煮て食べようとした。しばらくして煮えたころ合いと思いいふたを取って見たところナベの中にはドジョウの煮えたものではなく、ただ「血」がぐらぐらと煮え返っていたという。

その後、この小川の下ドジョウを取る者はいなくなると伝えられる。

（注）水子栗谷ツ六四八二番地の沢奥に湧き出ている泉のところに俱利伽羅不動の石碑が、嘉永戊申年（一八四八）六月願主世話人六名によって建立されている。

六、弁慶もぐり

昔、西塔坊弁慶が当所に住んでいたところ橋を作るとき下から支えていたので工事が早くできた。また弁慶のようにがんじょうに作られたので、その後、架替修繕などがなかったという。

(注) このほか弁慶が逃げてきて橋の下に隠れて追手から難を逃れた。それから弁慶もぐり、または むくり、の名が伝えられてきたともいうが『武蔵国郡村誌』のうちにも西塔（弁慶鎌倉初期の僧で源義経の従臣、号は武蔵坊）が当所にかり澄んでいたとき才智をもって架けたと記されている。針ヶ谷のこの橋の付近は鎌倉道が通っていた。

七、いしゃ坊主

渡戸に出羽三山の山伏がいた。その山伏が誌の間際に、「病気になったらおれに願えば直してやる」と言い残して死んだと伝えられている。お参りをして諸病平癒の願いごとがかなったときは、竹筒の酒を入れて墓碑の前に供えた。

(注) 現渡戸二丁目八八五に星野家の墓地があり、その一角に僧侶専用の墓がある無縫塔が立っている。遠山日充海信士。元禄十一戊寅年二月二日俗名 平太夫と見える。生前、東北羽黒山一派の修験者で月山・湯殿山・羽黒山 各登山すること五三度の修験者（山伏）で星野平太夫といった。死後、この墓を「いしゃ坊主」の墓と呼び人びとの願いをかなえてきた。

八、獅子舞

鶴馬の地は、古来から良い地形に恵まれ、太田道灌が江戸築城後、外城として川越と鶴馬が選ばれた。ところが鶴馬では、そのころ疫病が流行して村民が苦しんでいた。それを見た道灌の家臣が京より獅子一組（獅子三頭、山の神）を伝え、諏訪神社の社前で悪疫退散の獅子舞を奉納したところ、悪病が収まったと伝えられている。

(注) 渡戸の「星野家文書」には、寛政十一年（一七九九）「永代獅子祭益金差定連印帳」と文化十二年（一八一五）の「獅子歌書」が現存し、そのほかに市内には、下南畑八幡神社に獅子舞組がある。

九、赤飯塚

こんもり茂った丘状の林の中に、ひと群れのオトウカ（キツネまたはオホカミ）がいた。食糧が乏しくなると付近の畑の物が荒らされたり鶏は取られ、蓄え物までもいたずらされ大いに困った。

あるとき、一軒の貧しい農家の主人が赤飯を作ったときオトウカのすむ林の前に赤飯を持っていき、林の内に話しかけるように願いをかけた（荒らされた

り、いたずらされないように)。その後、この農家の物は不思議と荒らされなくなった。

これを聞き伝えた者は、我も我もとその丘状の林の前に赤飯を供えるようになり、その後、家々の作物は不思議と荒らされなくなったという。一話にはオホカミ戸も伝える。

(注) 現上沢一丁目地域は元は赤飯塚と呼ばれており『横田家文書』には元禄十二年(一六九九)の「入間郡鶴馬村畑方検地水帳」の中には「せきはん塚、下畑七畝六歩、左次右エ門」と見えるのが初見である。

十、お舟山

大昔、この辺(現榛名神社の付近)一帯が海であったころ、榛名大権現・薬師如来・貝塚稻荷の三方が舟に乗り当地まで参られたところ、運悪く舟が沈没した。榛名権現は大きな藤の木につかまり上陸し、現在の社(榛名神社)へ鎮座し、薬師如来は西の方に、貝塚稻荷は貝塚山にと鎮座したといわれる。舟の沈没した所をお舟山と呼ばれ、藤の木のあった所を藤島と呼ばれた。

(注) 榛名神社創立は定かではないが再建棟札二「文明九曆丁酉(一四七七)四月十日武州入東郡勝瀬村大願主林光坊武州吉見領小泉村大工加藤空之助」と記されている。明治の神仏分離前は榛名権現社と呼ばれ、修験万宝院が奉仕していた。祭神は『神職便欄』によると、埴山姫命(はにやまひめのみこと 土の祖の神)と豊宇気毘売神(とようけひめのかみ 五穀の神)の二女神である。貝塚稻荷は渡戸の三上三家により文化七年(一八一〇)四月に関東稻荷総社妻恋御社より神影正一位貝塚稻荷大明神を奉勧して貝塚山の上に社を建てた。